

武蔵野日曜集会

神の羔

――ヨハネ伝第1章15～34節――

1984年1月22日(武蔵野)

小池辰雄

聖霊のバプテスマ 律法は隠れたる福音 道德法 恩恵と真理 内的根源現実で実現 荒野に
 呼ばれる者の声 神の羔 贖罪者にして授霊者 元始福音 塵芥

【ヨハネ1・15～34】

15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『わが後にきたる者は我に勝れり、
 我より前にありし故なり』と、我がかつていえるは此の人なり』¹⁶ 我らは皆
 その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。¹⁷ 律法はモーセに
 よりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。
¹⁸ 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。
¹⁹ さて、ユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とをヨハネの許に遣して『な
 んじは誰なるか』と問わせし時、ヨハネの証はかくのごとし。²⁰ すなわち言
 いあらわして諱まず『我はキリストにあらず』と言いあらわせり。²¹ また問
 う『さらば何、エリヤなるか』答う『然らず』問う『かの預言者なるか』答
 う『いな』²² ここに彼ら言う『なんじは誰なるか、我らを遣わしし人々に答
 え得るように為よ、なんじ己につきて何と言うか』²³ 答えて言う『我は預言
 者イザヤの云えるが如く「主の道を直くせよと、荒野に呼ばれる者の声」なり』
²⁴ かの遣わされたる者は、パリサイ人なりき。²⁵ また問いて言う『なんじ若
 しキリストに非ず、またエリヤにも、かの預言者にも非ずば、何故バプテス
 マを施すか』²⁶ ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじら
 の中に知らぬもの一人たてり。²⁷ 即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の
 紐を解くにも足らず』²⁸ これらの事は、ヨハネのバプテスマを施したりし
 ヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。

²⁹ 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これ
 ぞ世の罪を除く神の羔羊。』³⁰ われかつて「わが後に来る人あり、我にまされり、
 我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。³¹ 我もと彼を知らざりき。
 然れど彼のイスラエルに顕れんために、我きたりて水にてバプテスマを施す
 なり』³² ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鴿のごとく天より降



りて、その上に止れり。³³ 我もと彼を知らざりき。然れど我を遣し、水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。³⁴ われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』

●聖霊のバプテスマ

¹⁵ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我がかつていえるは此の人なり』

「我より前に」どころではない。もう天地創造の前からですから。「勝れり」どころではない。マタイ伝3章で洗礼のヨハネが言っているでしょ。

「¹¹我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。

心を改めるために水の洗礼をヨルダンの川でやっているわけです。体を浸してね。

されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我はその靴をとるにも足らず、彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん。」

「聖霊と火でバプテスマを施す」

とハッキリ言っている。火のような聖霊ということ。「火」と言ったつて、そこらに燃えている火ではない。霊火のことです。霊火は聖霊のひとつの現象ですから。鳩のごとく現象したり、水のごとくであつてみたり、いろいろな現象をする。御霊は水に例えられたり、火に例えられたり、鳩に例えられたりする。とにかく自分で、

「あつ、これは聖霊のバプテスマだった」

ということをはッキリといっぺん体験しないと、まあ大体、ダメですね――「ダメ」と言ったらちよつと言いきすぎですけども――とにかく、やっているうちに、ある決定的な経験をしますから。人間は、それからすぐ聖人みたいになるというんじゃないですよ。しかし、それが常に原動力になつて展開していく。

キリストがこういう聖霊のバプテスマをするということを、ヨハネがキリストの本質をハッキリと言っているわけです。ところが、キリストは地上では聖霊のバプテスマをなさらなかった。ヨハネはいい加減だなんて思ったら、そうじゃない。聖霊のバプテスマは、キリストはちゃんと順序がある。そのことも今日、出てきます。

¹⁶我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。

これはいい節ですね。

「充ち満ちたる中」

というのは、「プレローマ」(満ちあふれ)という字で、エペソ書にも出てきます。キリストは神の力、生命、愛、知恵のプレローマなんです。何でも満ちている。「プレローマ」とはいい言葉ですね。満ち満ちていること。



私が言い始めた「無量」なんです。キリストは無量者、満ち満ちたる者です。量ることができない。「無」というのはおもしろいね、「ない」という意味ではなくて、「できない」という「ない」なんだ。無量、量れない。無数、数えられない。いい言い方だね。数えられないというのは、ないから数えられないのではなくて、あまりにも有りすぎて数えられない。内容があまりにも素晴らしくて、量りきれないということです。

その無量なる中から

「恩恵に恩恵を加えらる」

というこのギリシア語の言い方はおもしろい。「アンチ」という字が使つてある。恵みがくると、またその恵みに代わつて恵みがやってくるという。いくつでも恵みがやってくる。無量なる者からやってくるキリストの恵みですから。この恵みは地上の恵みではない。何か御利益的に考えたらとんでもないはなしです。キリストの知恵が、キリストの力が、キリストの愛が、キリストの義がおしよせてくる。それがこの「恩恵」ということです。キリストが溢れてしょうがない。内容は様々でございませうということ。だから、そういう力を受けてなす皆さんの業は、何をしていても、それが証^{あかし}になるわけです。

●律法は隠れたる福音

¹⁷律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。

「律法」というと、パウロが言っているとおり、「律法の義」というのはダメなんだよね。ユダヤ人は律法を外から守ったから。

「汝、殺すなかれ」

と、ユダヤ人もやはりそういうようにあの言葉をとっていたと見える。歴史的に自分たちの言葉を誤解しているという妙なはなしだよ、本当は。「なかれ」という字は「アン」という字がある。けれども、あそこに書いてあるのは「ロー」「なし」という字なんだ。

「汝は殺人せず。殺人することはない。殺人せじ」

ということ、なぜ、「すべからず」と訳すかと思うくらいだ。しかし、そういうようにしてみな、律法というものは

「すべし、すべからず」

という、いわゆる倫理的に解釈してしまった。それはそういう面もあるでしょう。あるでしょうけれども、もともととは大体、神さまが人間を、

「こうしてはいかん、こうせよ」

とか言つて、なにか叱りつけるような、押さえつけるような、そういうことではないと思うんだよね、私は。

親と子の関係でもそうです。悪いことをするから叱つたり、「すべし、すべからず」を言



うけれども、本来は、

「お前はよく勉強するね」

と――「せよ」ではなくて――「勉強するね」と言つて、信頼してかかるのが本当の親心だと思う。先生だつてそうなんだ。信頼してかかる。

親子の関係、師弟の関係、あるいは労使の関係にしても、結局、「信」なんだ。信、愛、信、愛関係が中心でなかったら、すべてがおかしくなる。律法をなにか非常に堅苦しく考えている。ある意味においては、大問題だと私は思うんですがね。だから、

「律法は実は隠れたる福音である」

と私は言う。どうもそんなことは言わないらしいね、「隠れた福音」というようなことを。相手を信じかかっているんです。相手を信じかかることは本当に愛することなんです。そうすると、怠けていたり、悪い気持を持っていたり、反抗しようと思つていたやつがみんな、

「私は悪かった」

ということになる。

「恵みが悔い改めに至らせる」

とパウロが言っている。ローマ書1、2章だったかな、あれは大事な言葉だね。そういった恵みが、本願が悔い改めをきたらせる。

「律法はかえつて罪を刺激する」

と、パウロはそういうところはちゃんと分かっている。「すべし、すべかず」は逆に、

「それでは俺はひとつ悪いことをしてやれ」

といつて逆に罪を刺激するという。まさにそうなんです。律法というものをそういうような角度からみていけば、これは罪を刺激する。縛るとそうなる。人間は自由が欲しいんだから。拘束されるのがいやなんだから。

●道徳法

「法」というのは、「水は低きに流れ去る」という自然法則です。法というのは自然なんです。風が吹けば木の葉が揺れるというのは自然なんです。法は実は自然なんだ。自然界というのは素晴らしいね。自然界は全部、法で動いているから。自然法で。雪が降るにしても、何にしても全部これは法則の世界で動いている。

人間界ばかりはこの法則の世界を破っている。人間界の法則というは、本当は信、愛なんだ。信愛のところ、に本当の自由がある。愛するということは自由な心の現れなんだ、信ずるということもみんな。何か律法に縛られて信じたり、律法に縛られて愛したりする、いわゆる「律法」ではない。それが本当の法なんです、道徳法というのは。

カントもちゃんとそのことは言っている。

「盗んだら悪いということはもう先験的に人間の判断の中にあるはずだ」



と。ところが、だいたいそれが狂っている人もあるようだ。けれども、良心はそのことを告げている。人が見ていれば悪いことをしない。見ていなければ悪いことをしてやろうというのは、やってみたら良心がとがめているんです。

「良心は、心は法を先験的に知っている」

と。そのことはカントが『実践理性批判』で言っている。経験以前に法は心の中にある。カントはそれを「善意志」という。

パウロもローマ書7章でそのことを言っている。善きことを願ってはいるけれども、自分の中に別な法則があつて――「別な法則」というのは悪いやつなんだ――どうにもならんと言う。

本来の心の世界はあるんだけど、何だかしらないけれども、そいつが他の力でやつつけられるという。これはサタンの力だ。サタンの力でやつつけられる。このサタンにどうしても勝たなくてはならない。別な法を持つているやつらに。

本来は、「すべし、すべからず」ではなかった。信愛であつた。それが本当の法だということです。道徳法というのは本来具有しているはずであつた。ところが残念ながら、良心の声が、自分でそれを踏みにじっていることを告げている。そこですべて人は「罪びと」だということになる。

「わが思うところ矩を踰えず」

という。やつと孔子も七十になってそうだったという。だから仕方がない、「すべし、すべからず」になってしまうんだね、

「ダメだよ」

というわけで。しかし、ダメだよではいつまでたつても本当にこつちがダメなんです、

「大丈夫だよ」

と言ってくれるひとがないと。この「大丈夫だよ」と言ってくれたのがこのキリストなんです。

「私のところへ来なさい。そうしたら、楽なひとにしてやる。律法を乗り越えて満たすひとにしてやるよ」

と。こういうわけです。だから、福音の世界はありがたい。

そういうのが本来、神さまが望んでらっしゃるところの律法、道徳法です。

「社会、社会」

ではないんだよ、道徳法がハッキリ立たないで何が社会かと言いたくなる。どうもこの頃の教育はきらいだね。もう小学校のときから「社会、社会」だなんて言っている。

昔の「修身」というのは素晴らしい言葉だね、「身を修める」というのは。私は修身という言葉が非常に好きなんだ。なつかしい言葉だ。修身の授業が好きだったんだよ、私は本当に。いつも感激して聞いていた。感激居士だったね、私は小さいときから本当に。校長先生が



素晴らしかったから、こないだ出かけて行って、その校長さんの書いたものがないかと思つて聞いたら、あつたからコピーしてきたんです。70年前のはなしだ。

そういう法則の世界に、道徳法に本当に乗ってしまつたらば、それが自然だ。しかし、なかなか乗つかけない。これに乗つからせてくださるのがキリストなんです。キリストはこれを完全に満たしたひとだから。キリストの中に入ると、自分がからっぽに無になるから、さつき言つた「プレローマ」が、無量が入ってくる。そうすると、楽になる。

●恩恵と真理

これがその、

17 おぼえて
律法はモーセによりて与えられ、

ということ。隠れた福音はモーセで来たけれども、しかし、その福音すらも、神さまの信愛すらも受けとつてなかつたわけです。信愛にまで背いたんです。神さまの言葉を取り損なつた。モーセの十誡は本当は、神さまに乗つかつてしまえばできたのに、乗つからないでこつちでもつていわゆる守ろうとしたから、みんなこれに失敗したというわけだ。

外から守ろうとしているのがこの「律法の義」というやつです。パウロは外から実際守つた。だけれども、そんなことではどうにもならないことが分かつた。ルターもそう。一生懸命で勤行して模範僧だつたけれども、心はひとつもうれしくはない。みなこれは外からだ。内側から守っていない。

聖書のこととそうです。聖書について外からいくら研究したつてダメだ。聖書の中に入つて、読み入つて、そこからものを言うようにならなければダメだ。だから、私はお説教しているのではない。私は告白している。中からものを言っている。

めぐみ まこと
恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。

「恩恵と真理」と言つたつて、これは同じことですよ。「真理」というのは「隠れたものが現れる」という字です。

「本ものがそこに現れる」

という字なんだ、「まこと」という字は。現れなければ、まことではない。観念なんです。キリストの真理というのは必ず実現しているものなんです。実現しているもの、実際に現じているもの。本当のことが、神の事態が、神の御意が実現している。これが本当の「真理」です。

「我は真理なり」

というのは、

「私は神さまの意志を、御意を、みんなにそのまま伝え、そのまま行っているよ」

というのが「真理」なんです。表裏一体しているところ、裏と表が一体しているところ、内外相即しているところ。内外相即、表裏一体――表裏一如でもいい――心身一如。これ



がみんな「真理」というんです。言行即如。何でもいいや。こういうのが真理なんです。観念は真理ではない。「我は真理なり」というのはそういうこと。恩恵と真理に満ちていたという。こういうものを受けとるのが恵みなんです。これが「真理」なんです。「理」なんていう言葉がおかしい。ただ理、理屈ではないんだ。「真理」という言葉はヘタすると躓きになるね。現実です。

●内的根源現実で実現

¹⁸ 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

「独子の神のみ」

と、おもしろい言い方をしている。ここところは非常に大事な句です。

「神の懷にいます」

という。日本語の「ふところ」というのはいい訳だよ。日本人は、和服では懷がある。「ポケット」なんて言ったってダメなんだ。ポケットでは感じが出てこない。

「キリストはポケットの中にいる」

なんてでは。カンガルミみたいに懷の中に入っている。「父の懷の中」という「の中に」「エイス」という字は、本当は「の中へ」入るという字です。ただ「中に」だけでなく、「中へ」入っていく動的な言葉です。それを静的な場合にも使いますけれども、そういうときには、本当にその中へ入りこんでしまっているという、「入り込んでいる」という字なんです。

「父の懷の中に入り込んでいるところの」

という訳が一番この「エイス」に当たるね。入り込んでしまっている。キリストは父の懷へ入り込んでいる。我々はキリストの中に入り込んでいなくては。

入り込んで、祈り込む。祈りいる。祈り入ると、全身をキリストの中に投げ入れて祈っている。「祈り」というのはそういうものですから。そうしたら、力がくる。こっち側でただ仰ぎみているような祈り方ではダメなんです。それはもう、十字架という門を通じて入るんだから。十字架という門を通じて入る。十字架を瞑想する。十字架という門を瞑想して、その中に入りこんで祈ってごらんさいよ。詩篇23篇みたいになるから。緑の牧場、憩いの汀の中に入る。楽しくてしょうがない。敵前の筵。頭には、全身には聖霊の油が注がれてくる。そういう楽しい境地を知らないですか、皆さん。知っているでしょうね。祈りがお願いばかりではダメですよ。もう感謝、讃美でなくては。

「どうなったっていいです。あなただけです。楽しくてしょうがないですよ」と、そういう祈りです。

みんな、アンビション(大志)を持たなければいかんですよ。どの道でも、

「自分のすることにおいては日本一になってやるぞ、世界一になってやるぞ」

と。それは僕みたいに大法螺をふく必要はないけれども(笑)。質的にはそうであればいい。



さつき、

「実現しているのがまことだ」

と言ったけれども、内的現実において実現していれば、これもまことだよ、外に現れなくても。内的根源現実で実現している生き方をしていれば、それでいい。神さまはちゃんと知っていらつしやるから。「お前は本ものだ」と。

● 荒野に呼ばれる者の声

¹⁹ さて、ユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とを

「レビ人」というのは「祭司」みたいなもので、レビの族は一番宗教的なことにたずさわる。

ヨハネの許に遣^{つか}して『なんじは誰なるか』と問わせし時、ヨハネの証はかくのごとし。²⁰ すなわち言いあらわして諱^{かた}まず

遠慮しないで言った。

『我はキリストにあらず』と言いあらわせり。²¹ また問う『さらば何、エリヤなるか』

あの預言者エリヤの再来かと。エリヤは天界へ行ってしまったから、「また来たのか」と。エリヤは死を見ずして天界へ行ってしまったからね、火の車に乗っかって。

答う『然らず』問う『かの預言者なるか』答う『いな』²² ここに彼ら言う『なんじは誰なるか、我らを遣わしし人々に答え得るよう^せに為よ、なんじ己につきて何と言うか』²³ 答えて言う『我は預言者イザヤの云えるが如く「主の道を直くせよと、荒野に呼ばれる者の声」なり』

「荒野に呼ばれる者の声」は第二イザヤ書40章に出てくる。

「なんじらの神いたまわく、なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ。

天使の声です。

² 懇^{ねんじ}ろにエルサレムに語り之によばわり告げよ、その服役の期^{とき}すでに終り、その咎^{とが}すでに赦^{ゆる}されたり。

バビロニア捕囚の服役のときが50年間。

そのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしところは倍したりと。³ よばわるものの声きこゆ^い云く、なんじら野にてエホバの途^{みち}をそなえ沙漠にわれらの神の大路^{おおじ}をなおくせよと。⁴ もろもろの谷はたかく、もろもろの山と岡とはひくくせられ、曲りたるはなおく、崎^け嶇^こはたいらかにせらるべし。

神さまが通るからというわけだ。

⁵ 斯^{かく}てエホバの栄光あらわれ人みな共にこれを見ん。こはエホバの口より語りたまえるなり。⁶ 声きこゆ^い云く、よばわれ。答えていう何とよばわるべきか、いわく人はみな草なり。その栄華^{はえ}はすべて野の花のごとし。」(イザヤ40・1～6)



これに要するにその

「荒野の声」

です。そういう自分は荒野に呼ばわるところの声で、神さまの先駆を、さきぶれをする。そのように自分もまたキリストのさきぶれなんだということです。

●神の羔

²⁴かの遣わされたる者は、パリサイ人なりき。

パリサイ人がやってきた。パリサイ人らしいね、この聞き方は。

²⁵また問いて言う『なんじ若しキリストに非ず、またエリヤにも、かの預言者にも非ずば、

「かの預言者」とは、エレミヤだろうと言う人もあるし――分らないです――あるいは「エホバの僕」の第二イザヤかもしれないし、あるいは申命記18章15節に、「一人の預言者を起こす」とあるから、その預言者かもしれない。

「¹⁵汝の神エホバ汝の中汝の兄弟の中より我のごとき一箇の預言者を汝のために興したまわん。汝ら之に聴くことをすべし。」(申命記18・15)

モーセのごとき一人の預言者を起こすという。そういうかの預言者でもない。

何故バプテスマを施すか』

だったら、そのバプテスマを施す権威がないはずではないかというわけだ。

²⁶ヨハネ答えて言う『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に知らぬもの一人たてり。

「私は水でバプテスマを施す。そういったお前たちが考えるような預言者ではなくて、自分は本当は最後の預言者だ」

と言いたいわけだ。キリストはヨハネのことを

「預言者のうち最大な者だ」

と言ったでしょ。ということはキリストは、

「お前は私をハッキリと指し示したからだ。昔の預言者は本当はまだ私のことをよく知らなかった。お前は私のことをよく知った」

と。それはしょうがないよね、現実にはキリストを見たものだから。正直、このヨハネは荒野で預言者らしい生活をしていましたから。自分は水で悔い改めのバプテスマをしているけれども、別なひとがいるよと言う。

²⁷即ち我が後にきたる者なり、我はその靴の紐を解くにも足らず²⁸これらの事は、ヨハネのバプテスマを施したりしヨルダンに向なるベタニヤにてありしなり。

²⁹明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これ



ぞ世の罪を除く神の羔羊。

はい、これは大事な言葉です。今日の題の「神の羔」はこれです。

「視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊」

という。この「除く」というのは「取りあげる」という字です。上へ取り上げてしまう。「取り除く」でいい。世の罪を取り除くところの神の羔である。

この「羔」の字の成り立ちは、下の点々は火です。火で焼いておいしい羊は子羊だから、それで「羔」ということになる。子牛の肉がおいしいでしょ。子羊はおいしい。それで火で焼かれて食べられるような羊ということなんだ、本当の意味は。それは子羊(羔)だよ。漢字というのはおもしろい。キリストは火刑には処せられなかったけれども、十字架にかけられた。火刑に処せられた殉教者は幾人もいる。ああいうのは天界で一番高いところにいる。

贖罪の羊だという。このひとは贖罪の人だと。我々の罪を贖うひと。旧約聖書は贖罪の宗教だから。羊とか当歳の雄牛とか、レビ記や出エジプト記に詳しく書いてある。

30 われかつて「わが後に来る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」

と云いしは、此の人なり。31 我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに顕れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり』

私のはさきぶれのバプテスマだと。

●贖罪者にして授霊者

32 ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鴿のごとく天より降りて、その上に止れり。』

これはマタイ伝やマルコ伝に書いてあるとおり、キリストに洗礼を施したら、キリストは水のバプテスマではなく、聖霊のバプテスマになってしまった。

「御霊が鳩のごとく彼の上に臨めり」

という。

「汝はわが愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ」

という声が聞こえてきた。

「我なんじを愛す。汝はわが悦びなり」

ということです。

33 我もと彼を知らざりき。然れど我を遣し、水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。34 われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』

そういうことをあらかじめ聞いているというんだから、洗礼のヨハネは。そういうことを



見るぞと。本当にそうなりましたというわけなんだ。

「これは御霊でバプテスマを施すひとだ」

と。それで、聖霊でバプテスマを施すということをヨハネが言い出した。その御告げと、実際に御霊がキリストに臨んできたから。

世の罪を負う羔はまた聖霊を施す羔である。ここに贖罪と聖霊とが出てくるわけです。これは「授霊」なんだ。霊を授ける。普通は、「受霊」というのは霊を受ける方だ。御霊を受ける。これは御霊のバプテスマを授ける。キリストは御霊のバプテスマを施すひとだから、こっちの「授霊」なんだ。授霊者だ。贖罪者にして授霊者なんだ。だから、

「十字架と聖霊」

だということがここでもちゃんと出ている。ヨハネがもう既に示している。

今度は、キリスト者というのは、受ける方のこの受霊者です。

「御霊を受けていなければキリスト者とは言わない」

と、パウロがローマ書8章9節で言ったではないですか。我々は受霊者なんだ。キリストはこっちの授霊者です。授霊者に対してこの受霊者とならなければキリスト者ではないというわけだ。パウロさんが言っているんだから仕方がない。パウロは十字架を極めて強く言い、また聖霊を極めて強く言う。ハッキリしている。パウロの構造は素晴らしい。しかし、本当にパウロを受けとっている神学者も牧師もほとんど見ないね、私は。聖霊の中からものを言っている人が少ないからしょうがない。

●原始福音

ダイスマンあたりは素晴らしい。「ウル・クリストントウム」（原始キリスト教）というところを最初に言ったのがダイスマンだ。「ウル・エバンゲリウム」（原始福音）だ。「原始福音」というのは、日本では私がそもそも言い出した。手島君もほとんど同時だったけれどもね。

「福音の原始に帰れ」

という言葉が最初に言った。それを手島君よりも先にスローガンにして講演した。それで「原始福音」という言葉ができてしまった。何か不思議ではないかね、私は。

「聖霊にてバプテスマを施す」

という。こういう言葉はいい加減に読んでダメです。

「さあ、私もその聖霊を施されている者にならなくては」

と。祈り入ってください。キリストの懐の中へ入ってください。懐の中へ入ったら、もう聖霊は来ますから。ええ。

「懐の中」というのは「聖霊の中」と同じことだから。何もむずかしくないんですよ。皆さんは何か非常に難しく考えているようだけれども。

「私は聖霊のバプテスマからちよつとまだ遠いようで、一体いつになったら……」



なんて、夢みたいなことを言っている。夢じゃないよ、もう現実だよ。すぐ直ちにと。本当に自分を投げ入れないからいけないんです。思われている事態を見ているから。自分なんてものを何かと思っているから。黙って、その境地に自分を入れてごらん。俄然そこでもって、坐っている体が浮き上がるくらいになるよ、バーッと。

「そんなのは怖い」

なんて。恐くはないよ、ちつとも。ちよつとも恐くない。私は自分を何ものとも思っていないから。楽でしょうがないんです、何も力む必要はないから。

今日読んだところは、そういう意味で非常に大事な贖罪のことと授霊のことをハッキリ、ヨハネが言って、

「この人をそのようにして受けとれ」

と言う。「聖霊は火だ」と言った。

「もし、焼かれるものがあるとするならば、それは己の意志である」

とサンダー・シング（1889～1929?）が言いました。自分の意志なんてものは焼かれなければダメだぞと。

「わが意志にあらず。汝の意志なり」

と、キリストが言っているではないですか、「わが意に^{こころみ}あらず、汝の意だ」と。

「自分なんてものは憎まなければ、私の弟子になれない」と言われた。

●
塵芥^{ちりあくた}

こないだ、手島君の十周年のときに武藤さんが、

「手島先生は宗教的天才だ」

と言った。それはまあ天才的なことはあつたさ。けれども、手島君自身はそんな天才なんて思っていないよ。自分を吐き捨てるように彼は時々ものを言っていた。ということとは、本当にキリストでなければやりきれない人なんです。だから、御霊が本当に臨んできた。

いわゆる道徳的に立派な人や哲学的にものを考える人は、なかなかこの十字架の世界が分らない。病めるものが医者を要するように、自分をしようがないと思うやつが救われていく。しかし人間は結局、五十歩百歩ですよ。何かにぶつかってみると、やつぱりこれはいかなんということは、どんなに立派な人でも必ず発見するわけだ、いわゆる人間的立派なんてものは問題じゃないということが。パウロは人間的には非常に立派だったんだ。ところが、

「そんなものは塵芥^{ちりあくた}と思う。このキリストのゆえに」

と言った。まあ、パウロさんは大変な人物だ。やはり選びの器だね。復活のキリストにひっくり返されるだけのやつなんだ。



「お前の立派さはダメだ。それは自己主張の立派だ。そんなものはひっくり返すぞ」と。ヒルティ（1833～1909）みたいなああいういわゆる聖者みたいな人だけれども、彼も本当に、

「己の意志を捨ててかからなければダメだ」

と言った。テニソン（1809～1892）の言葉に、

「我々の意志は我々のものである。ただそれはあなたのものとするためにあるんだ」とある。「インメモリアル」の中に出ている。

もう私は80歳にそろそろなりますけれども、これから私が一番読むものは詩なんです。東西古今の詩の本。もうスタートを切ってます。昨日もその人たちと話しておもしろかった。もう勝手に私は法螺を吹いてね。

「先生はとにかく80になって、そんなにいろいろなことをしようと思っっているんですか」

と言うから、

「これからが本番だ。今までは序の口だ」

と言ってやった。だから、20代の人をみると、うらましいよ。あなた方はもう20代でこんな福音を受けとったら、どんなことになるんだか。80くらいになったら見えなくなるんじゃないかな、光ってしまつて（笑）。終わります。

